はじめに

明治六年十月、征韓論の対立で下野することになった副島種臣は、板垣退助、後藤象二郎、またイギリスから帰国した小室信夫、古沢滋らともに、翌年一月、議会の開設を要求する民選議会設立建白書を左院に提出する。この建白書は、自由民権運動の出発点としての意義を持つものとされる。しかし、署名に名を連ねた副島種臣は、それ以来、板垣と袂を分かつ自由民権運動に加担することにはなかった。その後、板垣を含む時自由民権運動を支持していた彼は、明治十三年四月、岩倉具視の推挙により天皇の侍講に就任している。

明治三十年、副島の回顧によれば、幕末の勤王活動以来、彼の理想は、「君主制」と「議会制度」を実現するため、自由民権運動に協力したものと述べている。他方、板垣の建白書提出の意図はイギリスの議会制度である。

立憲君主制を日本に導入することにあった。ということは、議会制度の内容に関して、副島と板垣の間で大きな障壁があったということに変わりはない。副島の「君主制」と「議会制度」が交錯したものである。

なお、本論は、副島側の史料としては、「つぎのものに依拠した」。

一、『築海全集』（全六巻）一九一七年、一九三六年、副島の演説文を収集したものであり、現在のところ執筆年代の特定のが困難なものである。二、副島の講話集である一九九八年、門生の川崎又次郎の編集による副島の講話集である。三、副島種臣の『君主制』論と議会制度は両立し得たはずである。本論は、まず民選議会設立建白書作成の経緯から、じつめて副島の議会制度論を検討し、その後、副島の「君主制」と「議会制度」との関係を明らかにすることを目的とする。なお、従来から板垣と民選議会設立建白書に関する研究は多々あるが、副島については等閑に付されている。

安養寺信俊

副島種臣の『君主制』論
一 民選議院設立建白書の作成過程

明治七年、副島は、板垣らとともに民選議院を設立すべきとする建白書を左院に提出する。この間の事情について副島はつきのよう

に回想している。

「明治六年の末に民選議院の建白書を板垣後藤等君が出すことに
なった此草案は大方古沢滋か書いたものであるかためと履訳の文章
にして其眼目をたととして君主制を答え之に代えに議院政治を以て
せむことを望むに在りして我に同意しろと諸君が望まれたそこで我
は曰く「君主制を答えるようなことをでは拙者等の同意することは出来な
い」仰も我輩志士が勤と云ふのは他無し唯君主が制を為す能はざ
るを憂へて手を挙げたるものである即ち長くも若者、陛下が御自
身に神武天皇の御教を遊ばされたならば民魂を奮奮して奔命に狂す
ることであろう故に此草案の君主制を答える議論を拙者等は同意するこ
とを変得すとは居たる。是に於て板垣等諸君が応うて此処だけをどう
にしろ其書に於て故に同意を望むと言うたる時は宜しい君主制
の字を有司制を改訂したなら宜しからぬよう。有司制の弊害を防制
するが為に議院を作ると云ふならば我輩も亦同意しんと云ふもので
乃ち私も其書の加はりて建白をした。」

これによれば、当初、板垣は、「君主制を批判するために議
院政治を導入することを民選議院設立建白書の目的としたことにな
る。その「議院政治」は、大正政院の章草を起稿した古沢滋の影響も
あって、イギリスの立憲君主制を模範とするものであった。かりにイギ
リスの場合、実質的に議会に権力があるものとされる。

これに対して、副島は、王政復古の大号令の精神である「神武天皇
の御教」の実現が幕末以来の彼の理想であり、「君主制を批判
するようなる建白書の提出には賛成できない」として一旦は署名を断っている。

その後、副島は、民選議院設立建白書の目的を「有司制を批判する」
ということを板垣に合意している。ということが板垣の構想する議
会が、「君主制を批判」と両立し得る内容を持つものであったということ
が考えられる。言い換えれば、副島はイギリス型の議会制度とは別の
形態の議会を想定していたということになる。

ところで、副島と板垣は、「有司制を批判、」としては意見を一
を経て、副島と板垣は、「有司制を批判、」としては意見を一
にしている。そのことは、ひとつは、征韓論の分裂的なものであった
のである。権力の議会制度に関する意見を一にすることであり、板垣の構想する議会が、「君主制を批判」と両立し得る内容を持つものであったということが考えられる。言い換えれば、副島はイギリス型の議会制度とは別の形態の議会を想定していたということになる。

そこで、副島と板垣は、「有司制を批判、」としては意見を一にしている。そのことは、ひとつは、征韓論の分裂的なものであったのである。権力の議会制度に関する意見を一にすることであり、板垣の構想する議会が、「君主制を批判」と両立し得る内容を持つものであったということが考えられる。言い換えれば、副島はイギリス型の議会制度とは別の形態の議会を想定していたということになる。
党本部の一条にいう、「我輩に己に愛国愛国の一契の至誠の上より発憤覚もし来る」とする道は、即ち我々は現在の御政の旨を奉教し、造次傾顚、微上従下、唯大部の公論を以てし、常に誓約の旨を適達する在るのさびたと、ここに我々大部の御政文の旨意となるのさびたと、昭和元年三月十四日に発表された五箇条の御政文の旨意を指すと思われる。つまり、我々大部の御政文中の「広く会議を興し、万機公論に決すべき」を表現するものといえる。そこで、我々は「会議」、「議会」を開設するために、民選議院設立白書を提出するのである。

しかし、副島は、愛国公党の方針に全く納得して加わったものでなかったという。「明治八九年の文部板垣等が愛国公党を起すに付けて私に主領されと云ふことをついて、一言を言ふと云ふば、されればそれは今治八年の文部師範」と言うのは彼の「明治六七年」の記事さぼいかと思わされる。この私によって、板垣や西郷のように同郷士族をひつつて土佐や熊摩に引き込むことは副島の本意ではなかった。彼はあくまで「有司制」、もしくは「党派的行動にみえる板垣・西郷よりも異なる立場にいた」ということになる。つまり、副島は、「我輩大部の御政文の旨意を奉」いうことをする。
た私は鬼角に響いて楽ましむから丁度私は今度巻き添えられて
その屋敷は一方寸尺坪あるが其頃有栄桜の宮様賈習いたと仰申し
に依って...私は当時其金を持って支那漫遊と出掛けた。その当時
は、不平不満の反応事多発してはおり、西郷の西征戦が開かれている
紛争から逃れる目的で清国に渡ったのである。帰国後、明治十二年四
月、岩倉の勧めにより、宮内省御用掛兼一等侍講、侍講局総裁に就任
する。明治十九年三月、侍講職を解かれた副島は、宮中顧問官、さら
に明治二十二年四月には、憲法に関する諮問にあたる目的で設立さ
れた検察院の顧問に任命されている。つまり、副島は、みずからの
政治的役割を藩閥でも反藩閥でもなく、宮中に見出していったのであ
る。

副島の議会制度に関する意見は、「改進会」（会長副島種臣）の「心
得」にみられる。「第五条、我々が民権より希望の点は一議院にして
可而我們を善と認められる以上は他の行政上に我々は採用させる
の権ある者なり。是切に希望す言はは両院の説れども他の一院に於
ては我々人民上を要する事なし又これを要するの権なし故に我
們はこれに干渉せず。」

この「改進会」については、「種臣の門人が中心となって奔走し,
改進会といふものが出来た。改進会であって、改進会ではない。...」

その政治理念乃至至公義は種臣の理想なる王道無偏無党、独歩中正を標
榜したものであった。此の運動は十五年三四月の驟から進められている

もし「王道無偏無党」はより王道を便益に得るのだろうか。此の書
はさらに彼の理想を詳述する。「夫人生まる時
より国民の名を被るはなし。堅く亦選挙被選挙の権を有すべきなり
此義を以てすれば社会党なり」.

国に譲る者忠孝の本意なる斯くては王父とある者何の不可乏な有ら

道義を以て起こり道義を以て処るが道義は天の賦せ必ずあり

に役立っては改進なり偏義偏行は完全に非ざるなり且善さを
観る王者に達し決を多数に取る苟も此の義を推せば天下の公道成

すなるち、第一、全国民は生来、選挙被選挙の権を有する、「社
会党」第二、国家の「榮貴」、というものは「君父」が代表する

「王党」、第三、「道義」とは「天の賦するままの自由」である

「自由党」が、「改進会」にはすべて備わっており、王党にも自由

党にも社会党にも偏していない。「会」であって「党派」ではないと
いうのである。そこで、この「改進会」のいう三つの内容を、以下、

詳細にみてみよう。
大政大臣に執行方を依頼した『上覚使』が難解で解釈をなしつつ検討する。

まず、副島は、民選議会設立建白書の事情について述べている。

明治二十三年、国会が設立されることに当たって、天皇の心構えを説く。「徳川家を再興する」という文言に反対・反対の国会開設を見届け、大に皇の真実を強く願っている。

一方で、大義名分の差分を討論するのではなく、天皇の精神である「神武復古」を再現するという「私」の役目を強く願っている。

「日本は天皇の御家であり、私は公に優先の為に屈する旨」とされている。更に、公の役目は天皇の御家であり、私は公に屈する旨とされている。
『衆』の意向に従った政治を行うことを忠告する。これよりみれば、
「衆」の意志と国家の利益を一致させるためには、政治体制の改革が不可欠であるという立場をとる。

君主は、『御法』を実践することを通じて、国家の利益を図ることを主張しているほどである。"自覚"という言葉が使われ、政治家の役割を指摘している。
以上の見解のように、ここでは「国家」、「戸主」が間接的である平
等に普通選挙権を与えられ、それが「国家」の「戸主」、そして天皇
に対する否定的な見方をしてきたものであるтро ステ、その見
解は、それゆえ、それは「戸主」が「国家」を代表するものと証
証されているのである。そして、「戸主」が「国家」を代表する
と見解されるのは以下の理由である。

1. 全国民が代表するものと証証されている形で、政治の基本的な方針
及び政策を決定するにあたっては、国民代表である天皇が「御法章」
をもとに決定するものである。

2. 議会は、その「御法章」をもとに決
定するものである。このような形で、
講話は、政治の基本的な方針及び政策を
決定するにあたっては、「戸主」が代表するものと証
証されていることになる。

3. 天皇が「戸主」を代表するものと記
されている。「戸主」が、「国家」を代表するものである。

以上の理由から、「戸主」が「国家」を代表するものを証
証される。
昭和二年三月、民選議院を設立し、内閣を設けて内政を整備することを決定した。内閣は、直接政府を設けて内政を整備することを目的としていた。

一方、憲法草案は、民選議院を設立し、内閣を設けて内政を整備することを目的としていた。この憲法草案は、民選議院を設立し、内閣を設けて内政を整備することを目的としていた。この憲法草案は、民選議院を設立し、内閣を設けて内政を整備することを目的としていた。
全ふるする所以にして、社会成立の本体なり、と述べる。つまり、板垣は公的自由を伸張させることが、私的自由を完遂する方法であり、そのことは社会形成の基本事項であるとするとなるのである。彼はそのため、人民をして参政の権を、国家公的な事に与かし、私利私欲として、人民をして参政の権を拡大する必要性から、参政権の獲得が意図され、その結果、議会という代表機関が必要となるのである。

一方、板垣は「公衆の自由」を確保するには、政府による国民生活への干渉を排除すべきであるという。「私我主」は自由の政を望む者に、干渉の治を欲させる者なり、夫の公議を行うべきの政治を以て、干渉に干渉するが如きは、政教の分を済す、公私の別を識らずに由来する。それは、「道義」の実践、とは異なり、参政権としては具体的される政治的文脈における「自由」を基礎にした議会制度論は、イギリスの立憲君主制模範としてのものであった。英帝宝録の万々なる是其国民各権能を守り、敢て横樫抑民事なく、君民上下自由に参政権を与えることか干渉を排除することを唱えるのである。つまり、板垣は「自由」とは、副島の「自由」、「道義」の実践、とは異なったといえる。

このような板垣の「公衆の自由」を基礎にした議会制度論は、イギリスの立憲君主制模範としたものであった。「自由」は自由の政を望む者に、干渉の治を欲させる者なり、夫の公議を行うべきの政治を以て、干渉に干渉するが如きは、政教の分を済す、公私の別を識らずに由来する。それは、「道義」の実践、とは異なり、参政権としては具体的される政治的文脈における「自由」を基礎にした議会制度論は、イギリスの立憲君主制模範としたものであった。「自由」は自由の政を望む者に、干渉の治を欲せる者なり、夫の公議を行うべきの政治を以て、干渉に干渉するが如きは、政教の分を済す、公私の別を識らずに由来する。それは、「道義」の実践、とは異なったといえる。

板垣は、「自由」を保全する必要性から、参政権の獲得が意図され、その結果、議会という代表機関が必要となるのである。人民は自由にして、人間尊厳の真を貫き、地上世人の人上に位する。人民は自由にして、人間尊厳の真を貫き、地上世人の人上に位する。
それぞれ議会が天皇と国をつなぐ結節点の位置を占めながら、
その議会制度運用の主体は、副島においては上院にあり、板垣にあっ
ては政党にあり、伊藤にあっては上院に依拠した内閣があったのであ
る。副島の場合には、まさに議会は天皇と国をつなぐ結節点であり
自由」とは「道義」の実践を意味した。その結果、議員は、天皇の
「憲政」の意図を「忠孝」の精神で受け止め、その具体的な施策を
討議することになる。そこで、君主と天皇にあり、それは君主と
同義であるが、要の位置を占めるものと考えられているのである。

三 副島の一君万民論

さて、以上において、副島の「一君」と「万民」が議会制度を通じ
て結びつけるものであり、その制度の基礎を得ることになり、そこ
での決定的位置にあらゆるが君主にあることを見た。そして、君主
天皇が自ら「仁」の体現者となることが要求されているのである。
が、果して、それはいかにして可能なのであろうか。副島が「君主の
制」を主張する場合には、それが文字通りのデスポチズムや恣意的な独裁を意味して
ない保証はどこにあるのか。また、もしデスポチズムではないとする
ならば、もしかわらすそれが「制」とされる所以はどこにある
君民関係を説明した文章があるので引用する。

『菅原集』の中に『天地定位論』という一編がある。その中に、

君民関係を説明した文章があるので引用する。

『菅原集』の中に『天地定位論』という一編がある。その中に、

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。

君民関係を説明した文章があるので引用する。
こうして、「君」、「天皇は「天」と、「民」を媒介する存在として位置づけられることになる。そして、「君」と「民」を主宰し同時に媒介する政治的実現は、天皇制の成立と密接に関係している。天皇制は、天皇が「君」として存在し、民が「民」として存在し、その間で媒介される政治的実現である。
以上、主として明治七年の民選議会設立建屋に署名した副島、お
よび、明治十四年自治会設立の啓動からそれほど遅くない時期に開
された倉岡の議会制度論を検討するなかで、彼の『君主専制』論の内
容を検討してきた。それが『天』、『君』、『民』を極端にした『臣』、『民』
等の間接普通選挙制度、『院制』、『御法度』、『権力憲法構想』であるこ
とを明らかにする中で、倉岡の独創的『有司専制』論をひきつづく明ら
かに得たと思われる。さらに、そうした構想が宮中側近という倉岡
自身の政治的配置によってもあったことも明らかになった
ものと思われる。こうした明治十三年代の構想は、その後の伊藤博文に
よる明治憲法制定とは大きく異なる側面がある。伊藤による倉岡の
政治的配置と、倉岡が提出するような観点の姿勢を見ること
になるのかは、今後の課題としていった。

（注）
引用にあたり、適宜旧字体は新字体に。またカタカナは公然に改め
たことをお詫びします。
岡山大学大学院文化科学研究科紀要第十六号

前掲、『皇帝陛下御在所中所得詩序』一四頁。

16 同上、同四頁。
17 同上、一四頁。

18 『過日後藤嘉之郎などの自由党に、在所を訪れて』一九七○年、五四七頁。これは、明治四年一月二九日、同僚の元東京大学教授が、板垣と交際していたことを考察したと

きの返事である。

19 前掲、『自由党史（上）』一八六頁。

20 『板垣誌シスニ応じて』自由党史（中）一九五頁。

21 同上、一九九頁。
22 同上、一八頁。
23 同上、一七頁。
24 同上、一頁。
25 同上、一三頁。
26 同上、一八頁。
27 同上、一九頁。
28 前掲、『自由党史（上）』三八八頁。
29 同上、三九頁。
30 同上、三九頁。
31 同上、一三頁。
32 同上、一七頁。
33 同上、一頁。
34 同上、一頁。
35 同上、一頁。
36 『示説文』蒼海会集巻五一九七一、二三頁。

37 『天地権能論』第二巻、二三五頁二三月、を参照された。

38 前掲、『天地権能論』六三頁。

川崎又次郎著『精神教育』国光社八九八、七七頁。